

月刊

2015

12
月号

みんぱく

特集

集市

イスラームとともに時代と場所を越える市場 三島禎子
感度を磨いて 大坪玲子

タイの大洪水と水上市場 佐治史

インドのショッピング・モール 杉本良男

「地域とむすぶ」京都・宇治橋通り商店街 橋本和也

鼻と舌が憶えている

待ちに待った料理がテーブルに運ばれてくる。たちのぼる湯気。いい匂いにおなかが鳴る。いただきます、と箸を伸ばそうとする。

「ちよつと待つて」

同席の友人がスマホで料理の写真を撮りはじめ、ごちそうはおあずけ。間の抜けたシャッター音が鳴り響くたびに、目の前の料理のうま味が吸い取られていくような気がする。

ぼくは何かを思い出すと、映像よりも先に味や匂いが、鼻や口のなかに立ち上ってくる。

幼い頃、何度練習しても回れなかった逆上がりのことを思うと、鉄の味や酸っぱい匂い、がよみがえる。九歳で訪れたカトマンドウはヤクの毛糸の芳ばしい匂いと、カビっぽいパンの味がした。一七歳、南インドでお世話になったドクターのことを考えると、彼の家に漂っていた消毒液とココナツ油の匂い、シロップみたいなジュースの味が口に広がる。数年前、パンガロールのストで家から出られなかった一日のことは、友人宅のバルコニーに生えていたツルムラサキの葉を摘んでつくったスープの味と切り離せない。

口にし、鼻で嗅いだものが、雑多な記憶のかげらを立体的に結びつけてくれる。もちろん映像から味や匂いを思い出すこともできる。だが、味覚嗅覚からたぐりよせた風景はもつと豊かなディテールに満ちている。

矢萩多聞

プロフィール
1980年、神奈川県横浜生まれ。画家、装丁家。中学1年のとき学校に行くのをやめ、ペンによる細密画を描きはじめる。95年から日本とインドを往復する生活を送り、日本では個展を開催。2002年から本づくりの世界へ。研究書から一般書まで幅広く手がけ、その数400冊を超える。
著書に『インド・まるごと多聞典』（春風社）、『偶然の装丁家』（晶文社）。

四歳の娘は自分の写真が好きすぎて、もはや写真で見たことを本当の記憶だと思い込んでいくふしがある。写真で分かった気持ちになって、フレームの外の世界が単純化されてしまうのは、親として少しさびしい。インドの友人Mさんは肉魚が苦手、料理も嫌いだ。家族の食卓は、いつも茹で野菜とパンかご飯。息子は大きくなるとオーストラリアの大学へ留学した。慣れない土地での一人暮らしに数カ月でホームシックになり、食べ物が喉を通らなくなった。生活はすさみ、勉強どころではなかった。

ある日、彼は衝動的にスーパーで野菜を買いこみ、下宿の小さなキッチンで自炊することにした。だが、料理なんてしたことがない。とりあえず鍋で野菜を茹で、塩をかけて食べてみた。「おかあさんの味がする！」。思わず涙がでた。いくらでも食べられた。彼は元氣を取り戻し、その後、楽しい留学生活を送ることができた。

何気ないものの中に、何十年もの時や、何万キロという空間を一瞬でとび超えてしまうような大事な記憶が眠っている。

本づくりを生業にしながら、ぼくはいつも料理に嫉妬する。目ではなく、嗅覚や触覚に触れ、ちいさな記憶をよびさます一冊を作りたいと今日も手を動かしている。

月刊 みんなぱく

12月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
鼻と舌が憶えている
矢萩 多聞</p> <p>特集 市に集う</p> <p>2 イスラームとともに時代と場所を越える市場
三島 禎子</p> <p>4 感度を磨いて——イエメンのカート市場
大坪 玲子</p> <p>5 タイの大洪水と水上市場
佐治 史</p> <p>7 インドのショッピング・モール
杉本 良男</p> <p>8 「地域とむすぶ」京都・宇治橋通り商店街
橋本 和也</p> <p>10 集めてみました世界の○○
貨幣編
久保 正敏</p> | <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 味の根っこ
トウルンバ
米山 知子</p> <p>16 文化遺産おもてうら
修復とオーセンティシティ
——カンボジア、アンコール遺跡群
石村 智</p> <p>18 音の居場所
パリのムスリムの太鼓ルバナ
増野 亜子</p> <p>20 人間学のキーワード
無縁
浅野 久枝</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|

市に集う

イスラームとともに 時代と場所を越える市場

三島 禎子 みしま ていこ 民博 民族社会研究部

人はなぜ市に集うのか。
市場から商店街、ショッピング・モールまで、
あきないを超えた「市」の役割を考える。

すべてが集まる場所

ムスリム商人の市場に一歩足を踏み入れると、騒然とした雰囲気は飲み込まれる。一見無秩序に見える雑然とした空間には、同じ種類の商品を取り扱う店が集まり、商人や運び屋などの特化した仕事があり、みなそれぞれの仕事に余念がない。また、ちまたでよく耳にするように、パスポートや運転免許証さえ買うことができるなど、ひよつとしたらここには裏の商売への入り口があるのかもしれない。その真偽はともかく、市場は人とモノ、そして情報が集まる場所である。市場での買い物は、まずモノを見極める目が必要で、次におおよその価格を知ったうえで、

希望価格で買うための時間と根気が求められる。価格というのは、売り手と買い手の合意で決まる。モノの価値というよりは、そのとき、その場で、売り手がどのくらいのもうけが欲しいのか、買い手がいくら出せるのかというのが、価格を左右する。

このような市場の様子は、地球上の広い地域で多かれ少なかれ共通したものがある。わたしはサハラ砂漠の南端にあるセネガルで、迷路のような空間を歩き回ったり、呼び込みをする商人とおしゃべりしたり、「適切な」価格を見つけるために恐々としながらもわくわくして買い物をした。日本とは商慣習も雰囲気も異なるの

だが、日本以外の国だったらそれがふつうだろうと思ってしまうほどに「セネガルの」な市場が身体に染み込んでいた。実際、長いセネガル滞在のすぐあとモロッコに旅行したときは、思い込

みどりの市場があつて、不思議にも思わなかったので本領を発揮して価格交渉を楽しんだ。しかし、それから二〇年あまり経って再びモロッコを訪れたとき、サハラ砂漠の北側と南側で、イスラームの商習慣のもとに同じような市場があることにハタと気が付き、あらためて驚いた。

広がるネットワーク

サハラ砂漠は南北一七〇〇キロメートルにわたる。自動車や飛行機などが登場する以前はラクダと徒歩が唯一の移動手段だった。この広大な砂漠を越えて、金と塩の交換を中心としたサハラ交易が千何百年も前からおこなわれていた。つまり、モノと人が移動していた。特にイスラームが創始した七世紀以後、交易はイスラームの普及とともにいっそう拡大した。南のアフリカ商人はイスラームに改宗して、北のアラブ人と有利に交渉したという。モノと一緒に知識や文化、システムなどが移動した。特に交易人が集まる市場は、それらの集積場といつてもいい。

西アフリカの大陸には、マリのジェンネやニヨロ、ガオ、トンブクトウ、モーリタニアのシンゲティやワラタ、ニジェールのアガデスなどの交易都市が栄えた。古



エジプト、カイロ市内の市場



ニジェールのタマナの定期市



マリの宗教都市ジェンネの市場

代王国時代、首長はムスリム商人を保護し、その代わりに遠隔地からもたらされた珍しい産品や武器などのほか、イスラーム知識人の知恵と恩恵を得て権力の基盤を整えた。交易都市は同時に宗教都市でもあった。
今日、アフリカのムスリム商人は、イスラームのネットワークを利用して、大陸を越えて地球規模で貿易を展開している。移動の規模と商品の種類は変わったが、ムスリム商人の伝統は生き続けている。この驚きが、わたしの調査の原動力である。

感度を磨いて

——イエメンのカート市場

おろぼ 大坪 玲子 東京大学大学院総合文化
院 科学研究員

「カートを噛もう」

イエメン共和国サナア市のカート市場がもつとも混雑するのは昼どきである。男性があちこちに群がって、真剣なまなざしでカートを選んでいく。

カートは紅海を挟んだイエメンと東アフリカ諸国で消費される嗜好品で、新鮮な葉を噛むと軽い覚醒作用が得られる。イエメンはイスラム教徒が100パーセント近くを占め、イスラームではアルコール飲料は違法であるから、酒は飲めない。そのうえに娯楽施設も少ない。昼食後にカートを噛んで歓談することとは唯一に近い娯楽である。友人に話があるとき、イエメンでは「カートを噛もう」と誘う。



サナア市にある古いカート市場の店舗でカートを販売する親子

カートは生産地、色、分量などで分類できる。値段は五〇円程度から一万円近くまで幅広い。カートを噛む人はだいたいお気に入りの生産地がある。できればお気に入りのカートを毎日噛みたいが、懐具合とも相談しなければならぬ。午後三時をすぎると、カート商人は安売りを始めるから、特定の生産地にこだわらず、値段を優先する人も

いる。嗜好と予算の組み合わせは千差万別、みな違う。

市場にはその日の早朝に収穫された新鮮なカートが売られている。カートを見て、匂いを嗅いで、ちよつと手で触る。商人にカートの味見を勧められることもあるが、味見をするのはマナー違反である。良さそうなカートを見つけたら、商人と値段交渉を始める。値段交渉はほんの数分、ときには数秒で終わる。交渉が決裂したら、躊躇なく別の商人のところへ向かう。交渉が成立したら、現金で支払う。女性がカートを買いに行くのは、

五感をフル活用して

鼻屑にしているカート商人から毎日カートをかう人もいる。しかしカートは季節、降水量、気温、施肥や灌水の量や頻度などによって毎日品質が変化するから、鼻屑にしている商人が同じ生産地のカートを扱っているからといって、それが同じ品質のカートであるとは限らない。時間は多少かかっても、何人か



サナア市郊外にあるカート市場。生産地に近いのでサナア市内より安く買える



サナア市の新しいカート市場。正面向きでカメラ目線の男性2人はカート商人

の商人のカートを見て回り、お気に入りのカートを求める人が多い。カート愛好家は毎日視覚、嗅覚、触覚、聴覚（商人のことに嘘はないかを聞きわける能力も必要だろう）を使ってカートを購入し、最後に味覚を使って自分のカート感度を確認する。カートを噛んでから「騙された」「あの商人は嘘つきだ」などと嘆いてももう遅い。そんな愚痴をいうのは、自分のカート感度が悪いことを暴露しているにすぎない。

一方カート商人もそう簡単に客を騙すことはない。騙したことがばれたら、その客は明日からも二度と来ない。客を騙すことは自分の首を絞めることになる（もちろんすべての商人が清廉潔白というわけではない）。そしてカート商人もカートを仕入れるときは五感をフル活用する。自分が扱うカートの品質に敏感でなければ、客は離れてしまう。

カート商人も客も感度磨きに余念がない。感度の悪い商人は商売替えをするしかないが、感度の悪いカート愛好家は、商人の感度に頼ることができる。だから鼻屑の商人からカートをかう客は、自分の感度磨きを怠けているということなのである。

タイの大洪水と 水上市場

佐治史

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究科博士課程
日本学術振興会特別研究員

洪水を想定した集落構造

二〇一二年八月から二月にタイ国を襲った観測史上最大の洪水は、全国で死者八三二人、行方不明者二人（二〇一二年一月一七日時点…タイ国内務省）という甚大な被害をもたらした。関東平野に匹敵する広さの農地が浸水し、工業団地や空港、幹線道路、商業施設や家屋を飲み込んだ。生産や流通機能は麻痺し、生活必需品の供給不足と価格高騰が人びとを苦しめた。

しかし、筆者が滞在していた運河集落は、この非常に切迫した時期にあつて、同じ国とは思

えないほど「平穩」だった。洪水の原因にはチャオプラヤー河流域への、流下能力を上回る多量な降水があげられるが、幸いここは異なる水系に属していた。くわえて集落の構造である。道路が整備された現在でも、約二〇〇本の運河網が張り巡らされ、流量を増やしかつ流量を分散・配分することにつながっている。運河に面して建てられた木造の杭上家屋は、水位変動も織り込み済みだ。住民は舟を所有し、それを操る巧みな技術も身に付けている。

水上市場の底力

運河集落では商取引も船上でおこなわれてきた。ダムヌーンサドウアック水上市場は、二〇世紀初頭に始まり、生産者が青果物や食品を取引する定期市として発展した。上流部にダムが完成する一九七〇年代までは、雨季終盤の洪水は住民いわく「年中行事」で、満水の運河上で



洪水時の運河集落 (2011年11月2日)

の取引が常だった。現在のようには毎日二〇〇〇人、週末二日間で八〇〇〇人が来訪する世界的な観光地へ展開した後も、売り手の大半が集落の住民や近隣の生産者で、舟での移動や販売活動も健在である。

大洪水のときには、こうした水上市場の底力が際立った。運河内の水位が数センチ上昇しても、船上にいれば商品が浸水することはない。むしろ平時より水面を掻くオールかの動きは滑らかである。他の市場で品不足と価格高騰が続いたときも、地元の果物で溢れ、通常価格で取引されていた。洪水時はタイへの入国者数は約二割減じた。水上市場を訪れる客も確かに減少したが、

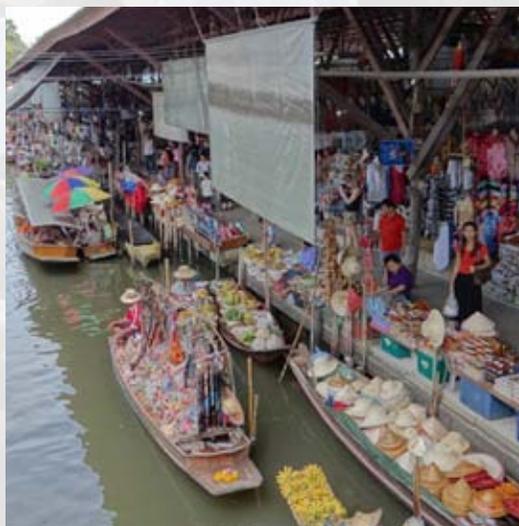


洪水時の水上市場 (2011年10月29日)

それは海外からの客に顕著なことで、青果物や食品を購入するタイ人客は増加していた。というのは、運河集落の宿泊施設や親戚宅に避難してきたバンコク周辺住民が「一時的な常連客」となったからである。普段は土産物や土産物を売る商人も、このときばかりは生活必需品を扱う商人に転身した。彼らの機知や身のこなしの柔軟性もまた、この市場の底力である。

災害と市場

二〇一二年、この年は日本の災害史においても重く深い意味をもつ。それから二年後の二〇一三年二月、広野となった三陸の町々の景色のなかで、そこに人が戻ってきたことを示してくれる証が、商店街や市場だった。困難な状況のなかでも、あるいはそうした状況においてこそ、市場のもつ力、すなわち人間のもつ力は発揮されるのかもしれない。



通常時の水上市場

インドのショッピング・モール

林立するモール

インドの商店街は「バザール」といって、間口の狭い小さな店が立ち並んでいるのがふつうである。この間口の狭さは売っているものにもいえて、たとえば自転車の修理を頼むには、まず部品屋でチューブを買ひ、そのあと修理屋に持ち込んで直してもらわなければならない。カースト制にもいえることであるが、社会が細分化されるとともに、互いの協力が必要になることで、さまざまな種類の人びとが全体社会に少しずつ貢献しながら共生できるシステムだともいえる。

インド社会は一九九〇年代から目ざましい経済発展を遂げた。それから四半世紀、この間に著しい変化が起こったのは、こうした消費のあり方であった。いわゆる中間層の台頭によって消費行動が大きく変化し、その

欲望をかきたてるように、大都市を中心に大型のショッピング・モールがつぎつぎと建てられるようになった。南インド、タミルナードウ州のマドラスマドラス(チェンナイ)には、老舗の大型デパートがあったが、それに加えて近代的なショッピング・モールができたのは九〇年代に入ってからのことである。そのオーナー

は、かつて移民としてマレーシアに渡り、その後事業に成功して、故郷のタミルナードウに凱旋した人だということであった。そのため、商品のデザインや色使いに、マレーシア趣味、ムスリム趣味が入っていたようである。ファストフード化の指標に、その後できたモールには、それまでとは違って、さまざまな要素が加わるようになった。もちろん、中心にあるのは海外ブランドなどの最新ファッションであったり、電化製品だったりするが、それに加えて、映画館やレストランなども入ったところから、それまでの大きな劇場で多くの人がひとつの映画を見る形式から、小さな規模の客席と、複数のスクリーンをもついわゆるマルチプレックスという形式が主流になってきた。ショッピング・モールにいわば、いくつもの映画を選択して見ることができるようになったのである。



チェンナイ市内のショッピング・モール (2009年)

また、ファストフードを中心にしたレストランもつくられる。首都デリー郊外のグルガオンにできたショッピング・モールには世紀の変わり目前後に、インドのいろいろな地域の特徴あるメニューが、ファストフード化されて並べられていた。そこでのいわゆる南インド・メニューは、南では朝食や軽い夕食に好まれるイドゥリ（米粉を蒸したパン）やドーサイ（米粉を水で溶いて円盤状に焼いたもの）などで、北ではどちらかといえば、おやつとして好まれている。

インド社会の変化が加速するとともに、新しいモールが次々できるが、古いモールは途端に人びとから相手にされなくなる。目まぐるしく盛衰をくりかえす大型ショッピング・モールは、インド社会の消費志向拡大の象徴であり、社会文化全体のファストフード化をうかがう大きな窓である。



チェンナイのショッピング・モール内にあるフードコート(2009年)

「地域とむすぶ」 京都・宇治橋通り商店街

橋本 和也 京都文教大学教授

苦戦する商店街

今日では、商店街は大規模なショッピング・モールやスーパーマーケットに顧客をとられ、九〇パーセント以上が「シャッター通り化」している。しかし、各店が特色をうち出す「激安商店街」や、下町情緒あふれる谷中・根岸・千駄木商店街などは改めて注目されている。ここでは京都府のJR宇治駅前で、同じく苦戦を強いられながらも独自の存在感を示している宇治橋通り商店街を取り上げる。以前は、ユニチカの宇治工場が三交代で稼働し、夜勤帰りの労働者が朝から刺身を買いにきて賑わい、まるで「企

業城下町」のような様相を呈していた。しかし一九七三年のオイルショック以後の紡績業界の不況とともに工場の人員が縮小され、商店街も衰退気味となり、さらに大型スーパーなどに押されて厳しい状況を迎えた。二〇〇〇年には「地域の人びとが安心して暮らすための核となり、来て楽しい『笑店街』」を目標に掲げたが、これといった成果が得られなかったという。しかし大学教員との協働を機会に事態は一変した。

「地域とむすぶ」商店街・大学

宇治地域における商店街と京都文教大学の人

類学研究者との協働は二〇〇三年の科研「二人と人を結ぶ」地域まるごとミュージアム」構築のための研究」を機会に進展し、学生の「地域商店街での実習」はフィールドワークの様相を一変させた。学生が各店舗を調査した成果が、商品のみならず店主の趣味や人柄のホームページ上での紹介になった。地域の「地蔵盆」調査の成果が、一〇月のフェスタでの商店街の地蔵（うじぞう）をめぐるスタンプラリーや小石に描く「おじぞうさん」作製につながった。エチオピアに小学校を建設するプロジェクトでは、販売したタオルに絵やメッセージを描いてもらい現地にもっていった。灯笼に絵を描くワーク

ショップをおこなったゼミは、夕間のとおりに灯りを並べた。また、振興組合では周辺の幼稚園や学校などに呼びかけ絵画作品を道路に展示し、地域のNPO団体なども活動紹介とワークショップをおこなった。以後「地域の文化祭」が商店街を舞台に展開されることになった。

現在では電線の地中化事業が終了し、空き店舗もすぐに埋まって飲食店やみやげもの店になり、それが自ずと世界遺産の平等院や宇治上神社を訪れる観光客への対応になった。また、二〇〇六年に大学のサテライトキャンパスが設置され、二〇一四年度からは両者の次世代によるあらたな協働もはじまっている。

継続する覚悟

行政でも振興組合でもなく、商店街と地域をむすび、個店同士をむすぶ「よき媒介者」となるのは、直接の利害関係をもたない大学と学生において他にはない。フェスタひとつをとっても大学と学生が加わることで三万人を集めるイベントになった。両者のかかわりには「継続性」が重要である。人類学者と調査対象者とは一生のつきあいとなる。協働においても大学も地域も「継続する覚悟」が必要で、それが信頼関係の基盤となるのである。



上：学生による商店街全店の紹介。2004年10月宇治橋通りフェスタにて
中：中宇治地域のお地蔵さん展。2004年同フェスタにて
下：手作り行灯で通りを照らす。2004年同フェスタにて

集めてみました世界の



久保 正敏 民博 名誉教授

現在、世界経済で流通するのは、金など貴重物と交換できる「本位貨幣」ではなく、信用に基づく「信用貨幣」だが、変動相場制の今日、為替市場で取引されるモノであり、いつ信用が崩れるかわからない。他方、原始経済では、入手や加工が困難な素材ゆえに価値のある、貝、石、クジラの歯、べっ甲、布、羽毛など実物貨幣が使われてきた。儀礼的な使われ方も多く、光り輝くモノなら聖性も帯びる。

おもに婚資として使われる儀礼的貨幣には、希少性や権威などの裏付けがあり、各国で流通する通貨よりよほど信用できそうだ。TPOに依存する儀礼的貨幣と同様に、近代国家成立以前は流通が地域限定の「地域通貨」が一般的で、江戸時代の藩札もその一種。

これら民族学資料としての貨幣を見るなかから、わたしたちが経済生活の基盤としている「信用」の危うさに思いをめぐらしてはいかがだろう。

※寸法の単位はセンチメートルです。

リベリア

金属製貨幣、儀礼的貨幣
花婿側親族から花嫁側親族への婚資、あるいは争いの調停や代償である。
H9.3 x W21 x D21
H0030929

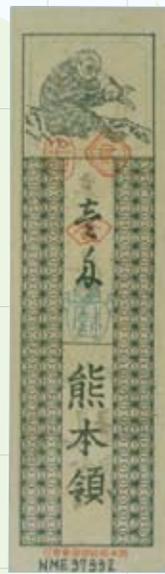


カメルーン

装飾用銀貨、マリア・テレジア・コイン
表面にオーストリア・ハプスブルク家の女王マリア・テレジア（在位 1740～1780年）と1780年の銘が刻まれ、裏面には同家の紋章である双頭の鷲が描かれている。紅海周辺地域で異様に人気が高まり、第一次世界大戦後にオーストリア政府が鑄造権をイタリアなど他国に譲った後も、各地でまったく同じデザインのまま1980年ごろまで発行され、周辺地域で流通し続けた有名なコイン。子宝に恵まれた同女王にあやかる安産のお守り、聖母と同名の点から女性の象徴、など人気の理由には諸説があり、装飾用としても多用された。
H4.1 x W4.1 x D0.2 ほか
H0006511



日本（熊本）
藩札のレプリカ
熊本藩では、享保年間（1716～36年）に飢饉が続き、熊本藩の財政が危機に陥ったため享保17年（1732年）に幕府の許可を得て藩札が発行され、以後幾度も発行されたらしい。民博は各値がそろったレプリカ・セットを所蔵している。この元貨幣は銀一匁（もんめ）と交換できる兌換（だかん）紙幣だが、当時の庶民はそれほど信用していなかったらしい。
H17 x W4.9
H0097992



ミクロネシア 石貨、儀礼的貨幣
ヤップ島のもの。花嫁の父から花嫁に贈る婚資で、結晶状方解岩を切り出して作ったもの。花嫁側からの婚資は貝貨で、なかでも白蝶貝製が珍重された。オセアニア展示場にて公開中。
H127 x W120 x D18
H0010156



日本 玩具紙幣
2012年度末に大阪府から民博に寄贈された、著名な玩具コレクターが収集した「時代玩具コレクション」のひとつ。1883～1897年に製作されたもの。
H6.5 x W10.7 ほか
ままごと遊びと水物玩具-53 (仮)



アメリカ合衆国
冥界銀行通貨
アメリカ華人の家庭において先祖崇拜の際に、先祖への供養として燃やして送る紙銭。中国地域の文化展示場にて公開中。
H17 x W34 x D1.7
H0269074

グアテマラ

装飾用コイン
ケクチの女性が用いる首飾りで、5セントボ硬貨70枚が鎖でつながれ、先端にシカの飾りが付けられたもの。コイン表面には、発行年を示す1924～1945の刻印と国鳥であるケツァールが描かれ、この鳥の名前がグアテマラの通貨単位である。補助通貨の1セントボ=1/100ケツァール。
H0.7 x W1.8 x D51
H0192775



ソロモン諸島 羽毛貨、儀礼的貨幣
ミツスイという赤い小鳥の羽根を樹皮の表面にはりつけてコイル状にした婚資。200羽もの鳥が必要で、男性はこれがないと嫁を迎えられない。オセアニア展示場にて公開中。
H0086151

ボリビア 祭礼用玩具紙幣

アラシタの祭のとき、エケコ人形にもたせる紙幣のミニチュア。アラシタの祭では、エケコ人形とよばれる人形に自分が手に入れたい物のミニチュアをもたせ、教会で祈とうを施し、家にもち帰る。
H8.3 x W5.6 x D5.6
H0187199



年末年始展示イベント「さる」
2016年の干支である「さる」をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「さる」を紹介します。
会期 12月10日(木)～1月26日(火)
会場 本館ナヒひろば

■関連イベント
◆トークイベント
「みんなく×ニフレル——人と生き物をつなぐ」
世界の人びとと動物との関わりをテーマに、本館と生きているミュージアム・ニフレルが人と生き物との関係、生き物文化誌を紹介いたします。

日時 1月11日(月)・祝 13時30分～15時
会場 本館第5セミナー室(定員100名)
※要事前申込、参加無料
◆ワークショップ
「むむむむなるほどーみんなく初歩き」
日時 1月11日(月)・祝 10時30分～16時30分(受付16時まで)

会場 本館展示、本館エントランスホール
※当日受付先着順 参加無料、定員350名、6歳未満の方は保護者同伴で参加
◆みんなくミュージアムパートナーズのワークショップ
※詳細はみんなくホームページをご覧ください。

国際シンポジウム
The 7th INDAS International Conference
"Structural Transformation in Globalizing South Asia"
日時 12月19日(土)、20日(日) 両日10時～
会場 本館第5セミナー室
※要事前申込、参加無料、発表・討論は全て英語で行い、同時通訳はつきません。

お問い合わせ先
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点事務局
e-mail: mindas@dc.minpaku.ac.jp

みんなくミュージアムパートナーズ
「点字体験ワークショップ」
日時 12月12日(土) 12時～15時30分
会場 本館エントランスホール
※申込不要、参加無料

連続講座
「みんなく×ナレッジキャピタル——世界の天然素材」
好評につき第3弾を開催中！

日時 19時～20時30分
会場 グランフロント大阪北館1階 ナレッジキャピタル「カフェエラポ」
※要事前申込、参加費500円(イードリンク付き)、定員各回50名
主催 国立民族学博物館 一般社団法人ナレッジキャピタル

12月2日(水)
南米アンデス文明における金の利用
講師 関雄二(本館教授)
12月16日(水)
インドの野蚕——その特徴と魅力
講師 上羽陽子(本館准教授)

みんなく展示ツアー
「貝の魅力——その使用価値、装飾的価値、象徴的価値」
12月23日(水)・祝 本館展示場 定員30名
講師 飯田卓(本館准教授)
※要展示観覧券

お申込み・お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06・6372・6530

カレッジセンター
「地球探究紀行」
みんなくの研究者が驚きと感動をお届けします。世界の文化の奥深くへ一緒にどこぞ。

時間 13時～14時30分
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円(定員各回50名)
共催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9 特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団

12月9日(水)
カザフの食文化——草原の恵みと人生儀礼
講師 藤本透子(本館助教)

12月16日(水)
ユーロピアの遺跡を訪ねて
——ポリビア・パラグアイ・アルゼンチン
講師 齋藤英(本館教授)

お申込み・お問い合わせ先
ウエーブ産経カレッジセンター係
06・6333・9087

●中央・北アジア、アイヌの文化
展示リニューアルのお知らせ
展示リニューアル工事のため、中央・北アジア、アイヌの文化展示場を2016年3月16日(水)まで閉鎖しています。

●展示場閉鎖のお知らせ
設備工事のため、2016年1月から3月に各展示場を順次閉鎖する予定です。詳細はホームページに掲載するともに、本誌1月号以降でもお知らせいたします。

●休日館、無料観覧日のお知らせ
年末年始は12月28日(月)～1月4日(日)まで休館します。1月11日(月)・祝 成人の日は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合、入園料が必要です。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

みんなくゼミナール

時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)

第451回 12月19日(土)
ベトナム、黒タイの台所
講師 樫永真佐夫(本館准教授)



ベトナム、黒タイの囲炉裏と火桶

みなはくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
時間 14時30分～15時30分
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

12月6日(日) 本館ナヒひろば
東南アジアの1日 ※この日は11時より開催
話者 信田敏宏(本館教授)
12月13日(日) 本館第5セミナー室
ベトナム、タイの台所
話者 樫永真佐夫(本館准教授)
12月20日(日) 本館展示場東南アジア横休憩所
タイ・ラオスの仏教寺院の歩き方
話者 平井京之介(本館教授)

関雄二 編
『古代文明アンデスと西アジア——神殿と権力の生成』
朝日新聞出版 1,300円(税抜)

農耕や土器づくりよりも先に神殿を築いた古代アンデス文明と、同様にまず祭祀センターを築いた西アジア文明。文明の形成期に権力はどう発生し、社会階層が形成されていったのかを2つの古代文明を比較しながら考える。

竹沢尚一郎 編
『ミュージアムと負の記憶——戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』
東信堂 2,800円(税抜)

戦争・公害・災害、20世紀は悲惨な出来事の記憶に満ちている。ミュージアムはこれらの惨禍を記憶し、それに公的な意味を与えることを求められてきた。しかしミュージアムは国家や公共団体が与えようとする意味の単なる媒体者ではない。どうすればミュージアムはこれからの出来事に複数の意味を与え、来館者を思索へといざなうことができるのか、を問う。

刊行物紹介

■山中由里子 編
『(驚異)の文化史——中東とヨーロッパを中心に』
名古屋大学出版会 6,300円(税抜)

アレクサンドロスも遭遇したという怪物から、謎の古代遺跡や女だけの島まで、たえず人々の心を魅了してきた(驚異)。旅行記や博物誌が語り、絵画や装飾品に表れるその姿は、人間の飽くなき好奇心を映し出す。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
第449回 12月5日(土) 14時～16時
カナダの魚食文化——日本人移民との関わりから
講師 河原典史(立命館大学教授)
カナダの食文化について、どのようなイメージをお持ちでしょうか。ビーフやメープルシロップ、そしてやはりサーモンなどの魚食の文化が挙げられるのかもしれない。カナダには多様な魚食文化がありますが、それらは19世紀末にカナダへと渡った日本人移民とも深い関係があります。イクラやカズノコ、ニシンのほか、今ではすっかりカナダ社会に溶け込んでいる巻き寿司「BCロール」から、カナダの魚食文化と日本人移民史について考えます。

●講義(14時～15時10分) 終了後、講師と気軽に交流できる懇談会を実施します。
第450回 2016年1月9日(土) 14時～16時
イスラーム化と向き合う先住民
——新東南アジア展示から読みとく
講師 信田敏宏(本館教授)

世界的なイスラーム復興の影響を受け、マレーシア政府は、1970年代からイスラーム化政策を推進するようになり、1980年代以降は、精霊信仰・アニミズムを保持する先住民オラン・アスリに対してイスラーム宣教活動を本格化させていきました。30年以上に及ぶイスラーム化政策は、オラン・アスリの社会にどのような影響をもたらしたのでしょうか。熱帯ジャングルに生きる森の民オラン・アスリの未来可能性について、考えてみたいと思います。
●講義(14時～15時10分) 終了後、東南アジア展示場の見学会をおこないます。
第451回 2016年2月6日(土) 14時～16時
博物館で食文化を考える
——みんなく展示場をフィールドに見立てて
講師 池谷和信(本館教授)

●講義(14時～15時10分) 終了後、展示場の見学会をおこないます。

味の根っこ



トルコ・アレヴィーがともに食べるお菓子

トゥルンバ

よねやま ともこ 米山 知子 神戸外国語大学非常勤講師



トゥルンバ。シロップに浸されて非常に甘い(撮影・Yücel Tellici)

行列の先には……

毎週末の朝一〇時過ぎ、トルコ共和国イスタンブール郊外、大きな幹線道路沿いにあるアレヴィー文化協会建物の二階外階段には、「ロクマ」を食べるために長蛇の列ができています。ロクマとは、トルコのアレヴィーが人びとにわけ与える食事のことだ。

一時になり行列が進んで建物のなかに入ると、食堂の壁際にはお盆とプレート皿が置いてあるのが目に入る。各自それをとって先にいる協会職員からロクマを皿に盛りつけてもらう。皿の中身はパン、葡萄の葉の肉詰め、羊肉入りピラフ、パイ生地のおいだにひき肉を入れ幾層にも重ねて焼いたボレッキ、なかにピスタチオなどが入った甘いパイのバクラヴァ、塩と水とヨーグルトを混ぜたアイラン。充実した内容で、トルコ料理の定番がそろっている。ものすごい人の数のため、大釜で運ばれてくる料理はすぐになくなり、一階の調理室とつながったリフトはフル稼働である。ロクマを受け取ったら好きな席に座って黙々と食べる人もいれば、知り合いに会って話に花を咲かせなかなか皿のなかへらない人もいる。

アレヴィーとロクマ

アレヴィーは、イスラーム教スンニー派が多くを占めるトルコにおいて、宗教的にマイノリティとされる人びとである。自らをイスラーム教徒と名乗ってはいるが、信仰内容には多く、修了した者やその家族、友人が訪れるため、部屋はいつも人びとの熱気であふれている。

このような状況でロクマが見られないはずはなく、ほぼ毎週誰かが何かを持参している。多くの場合甘いトルコ菓子で、チャイと一緒に食べると練習の後の疲れた体に沁みわたる。

毎週参加している教室の生徒がロクマをもつてくることは少ない。しかしあるときセマー教室の友人が、めずらしく箱を持参し教室にやってきました。彼女は箱を置くと、わたしが箱は何かを聞く間もなくすぐに練習に入った。一時間ほどすると彼女が箱を師匠の前にもって行く姿が見えた。師匠に祈りを捧げてもらうためだった。箱の中身はトゥルンバだった。小麦粉を練って揚げたものをシロップ漬けにした伝統的なお菓子である。トゥルンバを参加者全員に配り終わると、彼女はわたしのそばに来て「ロクマよ」と教えてくれた。じつは、婚約者がセマー教室



セマー教室でのセマー。教室では、若者のさまざまな人生模様が繰り広げられる



セマー教室でトゥルンバが配られる



ある日のロクマ。左上のパンから時計回りに羊肉入りピラフ、ボレッキ、ケーキ(バクラヴァの代わり)、葡萄の葉の肉詰め、飲み物としてアイラン

の違いがあり、食に関してイスラームとは違う規則がある。しかし現在のアレヴィーは、都市への移住者が増加するにしたがい、信仰内容や規則が変化している。そのような変化するアレヴィーの文化を維持しようとしているのが、アレヴィー文化協会で、週末の昼食としてのロクマの分配はその重要な活動のひとつとなっている。

ロクマはもともと、アレヴィーが願い事をかなえるために人びとに食事を分配するものだった。多くの地域がそうであるように、トルコでも人びとと食をともにすることはそのコミュニティで生活するうえで重要な役割を果たしている。自分の願い事を自分のだけのものですませるのではなく、そのような「共食」をおして皆に共有

に参加することをあまりよく思っておらず、彼女は非常に悩んでいたのである。

結局彼女は結婚後教室には顔を見せなくなつたが、身近な友人のロクマはわたしにとって「ともに食す」ことの意味を改めて考えさせられる出来事であった。

甘いトゥルンバ、苦い現実

わたしはイスタンブール滞在中、協会の重要な活動のひとつであるセマー教室の調査をおこなっていた。セマーとはアレヴィーの重要な儀礼のなかでおこなわれる身体動作のことで、セマー教室はセマーを若者に伝承するための教室だ。教室には参加登録をしている生徒だけではない。

トゥルンバ(5人分)

薄力粉	200g
水	1.5カップ
バター	30g
砂糖	大さじ1
塩	小さじ2分の1
卵	4個
揚げ油	適量
シロップ:	
水	2カップ
砂糖	3カップ
レモン汁	1個分

- ① まずシロップ。鍋に砂糖と水を入れて中火で15～20分煮立たせる。最後にレモン汁を入れて火を止める。
 - ② 次に生地。鍋に水、塩、砂糖、バターを入れて煮立ったら火を弱める。そこに粉をふるって入れる。5分くらいかき混ぜて火を止める。
 - ③ 生地の粗熱がとれたら、卵を1個ずつ入れてよく混ぜる。
 - ④ 生地を絞り出し袋に入れる。揚げ油を中火にかける。絞り出し袋の口金はギザギザの方が雰囲気が出る。
 - ⑤ 生地を5センチ程しばって、静かに油のなかに落とす。
 - ⑥ 生地が固まるまで待つ。色がついたらころがしながら全体をまんべんなく揚げる。揚げたら熱いうちにシロップに漬ける。
- * 温かいうちに食べてもいいし、しばらくおいてシロップを十分に浸してから食べてもいい。

修復とオーセンティシティ

—カンボジア、アンコール遺跡群

いしむら とも
石村 智 東京文化財研究所主任研究員

長らく無形の文化遺産や文化財を紹介してきた本コーナーでは、今月号から、有形の文化遺産を中心にとりあげる。世界遺産の修復においても、過去の営みをいかに伝えるかという、人間くさい議論がおこなわれている。

さまざまな修復の理念

長年にわたる内戦が終結した翌年の一九九二年、カンボジア・アンコール遺跡群はユネスコ世界遺産に登録されると同時に「危機遺産」リストにも記載された。それを受けて日本をはじめ十数カ国が、内戦中に荒廃したアンコール遺跡群の修復事業に参加することとなり、あたかも「修復オリンピック」の様相を呈した。しかし修復をめぐる「真性」をいかに保つかという点

においてさまざまな議論がある。オーセンティシティとは、遺跡のオリジナルな状態が確保されていることを意味する。アンコール遺跡群の修復にあたっては、このオーセンティシティを保ちながらおこなうことが国際的なルールとなっている。そのため修復はオリジナルを損なわないよう最小限にとどめ、新しい部材や近代工法の導入をできる限り避けることが求められる。しかし各国がおこなう修復は、それぞれのチームの理念に

沿っておこなわれるため、実際にはさまざまなアプローチが試みられている。例えばフランスの極東学院(EFEO)が手掛けたバプーオン遺跡では、基礎を安定化させるためコンクリートの擁壁を内部に設置し、その上に石材を再構築するという方法がとられた。日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JASA)が手掛けたプラサット・スープラ遺跡では、建物自体が大きく傾いていたので、いったん建物の石材を全解



EFEO (フランス) によるバプーオン遺跡の修復

体し、基礎を再強化した後、石材を再構築する方法がとられた。このとき既に破損していた石材

は可能な限り補修して再利用しつつ、部分的には新材で補うこととした。中国政府アンコール遺跡救済チーム(CSA)が手掛けたチャウ・サイ・テポタ遺跡では、崩れていた建物の石材を再構築する際に、破損していた部材を大胆に新材に置き換えるという手法がとられた。



CSA (中国) によって修復されたチャウ・サイ・テポタ遺跡

このように実際の修復のアプローチは多様であり、その妥当性についてはさまざまな議論がある。それを調整する場として、アンコール遺跡保存国際調整委員会(ICCA-Angkor)という会議が年二回、定期的に開

かれている。ここには各国の修復チームに加え、カンボジア政府・アンコール遺跡保護管理機構(APSARA) およびユネスコが参加し、各国の修復事業の報告とその妥当性の議論がおこなわれる。しかし委員会として「こうすべきである」という方針が定められているわけではないので、実際には各チームの自主性に委ねられているのが現状である。

う西トップ遺跡の修復チームの二員として事業に携わり、そのなかで修復をめぐるオーセンティシティの議論に直面するという経験を得た。西トップ遺跡の南祠堂の修復において、当初は部分的な解体をともなう修復を予定していたが、実際には基礎が不安定であることが判明したので、最終的には全面的な解体をおこなうに至った。しかし委員会の場で、解体はオーセンティシティを損なうのではないかと、異議が示された。なぜなら、解体はある意味で現状を変更する破壊行為でもあるからだ。

それを受けてわたしたちは、解体は「調査修復」の理念に基づいておこなったものであると説明した。わたしたちは解体と並行して基礎部分の考古学的発掘もおこない、遺跡の構築プロセスの詳細を復元するという成果を得た。そのうえで、解体は単に修復のみを目的としたものではなく、その遺跡をより深く理解するためのものでもあることを説明した。こうした説明を経て、わたしたちの理念は委員会で一定の理解を得ることができた。



JASA (日本) によって修復されたプラサット・スープラ遺跡

実践から生まれる遺産保護 筆者は二〇〇六年〜二〇一四年度まで奈良文化財研究所がおこな



奈良文化財研究所による西トップ遺跡の修復

このように、修復をめぐるオーセンティシティの議論は必ずしも一定の規範があるわけではない。ケース・バイ・ケースで議論されることで、ゆるやかなコンセンサスが形成されていくのが、実態であると考えられる。文化遺産に関する理念は、まさに実践のなかから生まれてくるというべきを目の当たりにするエピソードでもあった。



バリのムスリムの太鼓ルバナ

ムスリムが多数派のインドネシアにおいて、ヒンドゥー教徒が人口の大半を占めるバリ島。そこに暮らす「少数派」のムスリムたちにとって、杵太鼓ルバナの演奏はどのようなものであるのか。



嫁迎えに出かける人びとの列。ルバナを持った女性たち（ニユリン村）

ムスリムの嫁迎え

強い日差しを、真っ赤なそろいの衣装を着た女性たちが小型の杵太鼓ルバナを叩いて歩き、その後を人びとがついていく。しんがりは分厚い大型のルバナと、大正琴に似た楽器マノリンを抱えた男性の楽団だ。彼らはバリ島東部・カランガスム県のニユリン村の人びと。明日の結婚式のために隣村に花嫁を迎えに行くところだ。花嫁の家に到着すると、人びとは茶菓でもてなされ、歌と踊り、演奏を披露した。話し合いの結果、無事に結婚が承認されると、赤い衣装の女性たちが花嫁の腕をとり、人びとは再びルバナのリズムとともに、にぎやかに村へと帰っていった。

ニユリンは約二〇〇年の歴史をもつムスリムの集落で、その始祖はお隣のロンボク島から渡ってきたササク人である。男性たちが演奏する大きなルバナは、彼らの先祖がロンボク島からもってきた伝統的な楽器である。バリ各地に点在するムスリム集落はそれぞれ祖先や歴史が異なり、そうした違いを反映して、構造もサイズも演奏法もさまざまなルバナが演奏されている。

ヒンドゥーの島のムスリム

バリはヒンドゥー教徒が人口の約九割を占める「神々の島」であり、その豊かな芸能文化は世界的に知られている。青銅の器楽合奏ガムランや華やかな伝統舞踊は寺院や個人宅で催される儀礼のためだけでなく、観光客のためにも頻繁に上演され、絵ハガキやポスターにも登場する。しかし対照的にバリのムスリムの音楽や芸能は、ほとんど注目されてこなかった。

バリの多数派であるヒンドゥー教徒のなかには、ムスリムを「よそ者」と軽蔑する人もいる。たしかに金を稼ぐために他島から移住してきて、低賃金労働につく新参のムスリムも多い。そもそもインドネシア全体ではムスリムが圧倒的に多く、ヒンドゥー教徒は少



マウリッドのルバナ演奏と賛歌の朗誦（プガヤマン村）

数派なので、ムスリムに対して不安や反感抑圧を感じがちである。インドネシアでヒンドゥー教徒が多数派なのはバリ島だけ。だからヒンドゥー教徒の人びとが「バリ＝ヒンドゥー」のイメージを強調したくなるのも心情的には理解できる。

しかしバリにはニユリンの人びとのように、数百年も前からヒンドゥー教徒の領主や近隣の人びとと平和に共存してきたムスリムもいる。彼らは決して新参の「よそ者」ではない。宗教は異なっても、彼らもまたバリで生まれ、バリで育ち、バリ語を話すバリ社会の一員であり、ガムランとは異なるルバナの響きも、バリ文化の一部なのである。

マウリッドのルバナ演奏

バリのムスリムの芸能がもつものにぎやかに上演されるのは、預言者ムハンマドの生誕を祝うマウリッドのときである。賛歌が朗誦され、ルバナ演奏や舞踊が上演されて、集落は祝祭的な気分にも包まれる。近隣や他村からも招待客や見物人がやってきて、集落は外に向かって開かれる。バリ北部のプガヤマン村のマウリッドでは、ルバナ伴奏で伝統武術シラットの試合がおこなわれ、かつてはヒンドゥー教徒を含め多くの人びとが遠方から腕試しに集まったという。南部のクパオン村では、造花とゆでたまごで飾ったパレスジという担ぎものが、ルバナ演奏と踊り手たちに先導されて、近隣をパレードし、見物客を集める。



シラットの試合とルバナ演奏。シラットは二人ともムスリム（プガヤマン村）

いくつかのムスリム集落では、マウリッドのようなムスリムの祝祭だけでなく、ヒンドゥー教徒の領主や僧侶の儀礼でもルバナを演奏する習慣が見られる。そのような儀礼での芸能上演は、集落同士がお互いに敬意をあらわし、友好関係を切り結ぶ場にもなってきた。最近では政府主催のフェスティバルなどでムスリムが芸能を上演することも、少しずつ増えている。ルバナはバリのムスリムにとって、ヒンドゥー教徒とは異なる自らのアイデンティティを象徴するものがある。そして村の外の演奏は、自分たちの文化を誇り高く表象すると同時に、その上演をとおして、自らもバリ社会の一部であることを人びとに理解してもらううえで、貴重な機会なのである。

増野 亜子

ガムラン演奏家／東京藝術大学非常勤講師

「そこを行くあなた、自分とは無縁なことと思わずに、まあ、ちよつと話をお聞きなさいまし……」

「自分とは無縁なこと」といえば、どなたも「自分とはまったくかわりがない、関係ない」ことと理解なさるだろう。近年は「無縁社会」なる語が使われるようになってきた。NHKのドキュメンタリーにおいて、社会とのかかわりが薄く、孤独に生き、「無縁死」つまり孤独死する人が多くなったという現代日本社会の問題が取り上げられたときから、この語が使われ始めた。日本語で「まったくかわりがない」を意味する「無縁」から作られた造語である。

ところが「無縁」という語は日本各地の地域社会のなかでさまざまな意味をもつて存在している。「無縁」「無縁様」あるいは「無縁仏」の語が意味するものを列記してみることしよう。

- ①身元不明の死者
- ②絶家して祀り手のいなくなった仏

それとほぼ同じ意味のものとして、祀り手のいなくなった墓「無縁墓」がある。この問題も近年長く取り上げられている。

ここまでは「無縁社会」として取り上げられる「無縁」とほぼ同一の意味、すなわち「関係ある人」「縁のある人」がいない靈魂に対する用語である。しかし民俗社会で「無縁」「無縁仏」とよばれている死者・靈魂はこれだけではな

- ③成人せずに死んだ子どもおよび、未婚のまま死んだ者
 - ④水死、海難死、事故死、自殺などの変死、異常死した者
- この③も④も親や兄弟、親戚がいたとしても「無縁」として供

を
か
か
わ
り
を
考
え
る

人間学の キーワード

無縁

Disconnected Spirits, Relationless

あきの ひさえ 京都精華大学特別研究員
浅野 久枝

養をしなくてはならない。さらにもっと理解に苦しむ事例がある。

⑤亡くなって三三年か五〇年経ち、年忌あげた死者の霊ほとんど知られていないが、年忌あげた霊(仏)を「無縁様」とよび「普通の先祖よりも位が高く、大切にしなければならぬ」などとする地域があるのだ。

年忌あげた仏は「先祖になる」「カミサマになる」などといわれる事例が全国的には多い。一方、年忌あげた仏を「無縁様」とよぶ事例は宮城県北部に何カ所かみられ、岩手県、青森県、福島県そして大分県の一部に散見できる。また岡山県でも年忌あげた仏が無縁仏のような存在であるミサキになるとする事例がある。筆者は現在、この⑤の「無縁様」「無縁仏」を追求している最中で、今後その成果を発表する機会もあるかと思うが、少なくとも⑤の「無縁」は「縁がない」どころではなく、深い関係をもつ靈魂(仏)である。また、③も④も、結婚していない、死に方が悪いなどの理由で「無縁」とよばれているだけで、決して無縁な仏ではないのである。

一般語としての「無縁」の意味は動かしようがない。その語を元にした「無縁社会」「無縁死」「無縁化する人びと」の問題はもちろん重要視すべきだが、民俗社会のなかでの「無縁」は必ずしも「縁の無い」仏ではなかった。「先祖が無縁様」とあるという伝承をもつ人びとがこの日本社会のなかに現在も生きていくことに注目し、「無縁」の観念をもう一度考え直すべきではなからうか。それにより「無縁社会」を克服する思考法を見つけ出すことができるかもしれない。

編集後記

13日の金曜日にパリで起こった同時テロ事件。20年前にパリにいたころの記憶がよみがえった。今回の襲撃は、自爆があったスタジアム以外は、10区と11区に集中しており、むかし住んでいたアパルトマンの近所である。買い物や散歩でよく歩いた通りで、多くの被害者が出た。

じつはわたしがパリで2年間過ごした90年代半ばにも一連のテロ事件が起こった。ある日曜、リシャール・ルノワール通りの青空市に買い出しに行くと、足から血を流した女性の手当てに救急隊員があたっている。一部のスタンドの周りに立入禁止テープが張られており、日常の光景が不穏な雰囲気に含まれている。八百屋のおじさんに聞くと、「ココットミヌットが爆発したんだよ」という。圧力鍋に仕掛けられた爆弾が、野菜スタンドの下に隠されていたが、起爆装置がうまく機能しなかったので、数人の買い物客が軽い怪我を負うにとどまったらしい。もう少し早く買い物に来ていたら、爆弾が「正しく」起爆していたら、パリの秋空に自分が吹き飛んでいたかもしれない……と当時はゾッとしたが、今回の襲撃に比べると子どもだましにさえ思えてくる。

パリであれ、ペイルートであれ、バグダードであれ、ナイロビであれ、人びとが安心して市に集うことができる世界になってほしい。

(山中由里子)

●表紙：マリのバンジャガラ断崖近くの定期市（撮影・三島禎子）

次号の予告

特集

さる

月刊みんなぱく 2015年12月号

第39巻第12号通巻第459号 2015年12月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
編集委員 山中由里子（編集長） 河合洋尚 菅瀬晶子
丹羽典生 丸川雄三 南真木人 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

ゆったりがぎっしりと。

春のみんなぱくフォーラム2016「ゆったり東南アジア」

2015年12月～2016年2月

古来、多様な民族と文化が交錯してきた東南アジア。近年の経済成長により急速な変化が訪れつつある一方で、人びとの生活はのんびりと流れ、よそものであっても温かく迎え入れてくれるような、ゆったりとした心構えもあるそうです。南アジア展示と同じく2015年3月にリニューアルした東南アジアの新展示フォーラムが、12月より始まります。題して「ゆったり東南アジア」。実行委員の福岡正太先生にお話を伺いました。

まずは、みんなぱくゼミナールやウィークエンド・サロン、友の会講演会では、展示の紹介や、収集・制作の背景などを講師がお話します。展示の理解がぐっと深まります。モノの展示では伝えにくい現代の東南アジア社会が抱える問題については、みんなぱく映画会で3本の映画をとおして考えます。時代や地域、テーマは異なりますが、東南アジア社会を生きぬく子どもの姿が共通して描かれているそうです。

そして充実しているのは芸能にまつわるワークショップと講演です。マレーシアやインドネシア、ラオス、カンボジアの仮面舞踊やパフォーマンス、影絵芝居について、研究者やパフォーマーを講師に全6回おこなわれます。儀礼や祭りなど、生活に息づく芸能について学び、実際に身体を動かしてみることで、東南アジアの人びとの日常の姿を垣間見ることができることでしょう。

新展示をもっと楽しみ、東南アジアのゆったりとした日常にふれる新展示フォーラムに、ぜひご参加ください。



インドネシア、バリ島の魔女ランダと聖獣パロンは、新しい展示のためにあらたに制作されたものです



展示場に設けられた「ゆとりぎスペース」。ここで腰掛けてひと休みすれば、東南アジアのゆったりとした時間の流れを感じ取ることができるかもしれません



インドネシア、ジャワ島西部の人形芝居ワヤン・コレックの木彫り人形は、一体一体が特徴的な顔をしていて、それぞれに役回りがあります。その種類や顔つきの多様さは、この地域に多様な民族、文化の往来があったことをうかがわせるようです

※催しの詳細は「みんなぱくinformation」(12-13頁)、みんなぱくホームページの「ゆったり東南アジア」のページ (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/event/forum/201512seasia/index>) をご覧ください。

みんなぱくをもっと楽しみたい人のために——— 会員制度のご案内

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。電話06-6877-8893(平日9:00～17:00)

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。